



## 中央大学のグランドデザイン — 多摩キャンパスの落成 —

新型コロナウイルス感染症の影響で、春学期はオンライン授業となった。それは郊外の多摩キャンパスだけでなく後楽園、市ヶ谷、市ヶ谷田町の各都心キャンパスも同様だ。学生の姿なき静まり返ったキャンパスが、いま眼前に広がっている。言うまでもなく、大学キャンパスは教育面においては教室を用いた教員と学生による対面授業が当たり前だった。中央大学は大学設置基準に基づいてより良い教育研究環境を目指して多摩キャンパスを整備し駿河台から移転した。多摩に至るまでの歴史過程については、これまで「多摩移転前」そして「多摩移転計画」で述べてきた。今回はその総決算として多摩キャンパスの落成について振り返っておきたい。

### 多摩キャンパスの落成 — 百年の大計 —

1977年10月、2年半にわたる工事を経て多摩キャンパスが落成した。1960年の多摩校地取得から数えれば、じつに17年が経過していた。この間、施設基本計画は大学紛争やオイルショック、また様々な法的規制の影響を受けて2度の変更を余儀なくされた。

日本の私学史上、前例を見ない法・経済・商・文の文系4学部の全面移転を可能にした総工費約470億円をかけた23棟からなる白亜の校舎群は、そのような過程を経て約15万坪の広大な多摩丘陵に姿を現したのである。

翌11月、多摩キャンパスにおいて10日・11日・13日の3日間、多摩校舎落成記念式典と創立90周年記念祭が盛大に挙行された。本来、創立90周年は1975年であった。しかし、多摩キャンパスの建設工事は、その年に始まったばかりであった。そうした事情から創立90周年記念事業は先送りとなり、多摩キャンパスの落成を待ってそのお披露目という形で二つのセレモニーが同時に催されたのである。

初日、来賓約1400人が多摩キャンパス9号館(クレセントホール)に参集した。法人を代表して挨拶に立った渋谷健一理事長は、多摩キャンパスの落成を中央大学が「百年の大計」をかけて策定した施設基本計画による首都圏の私学では数少ない理想的な学園の誕生と所懐を披歴した。

また教学を代表して式辞を述べた戸田修三学長も永年の悲願であった「百年の大計」の中で最も重要な教学施設の充実計画が多摩の地に結実した喜びを語った。そして、真に大学の名に相応しい教育環境づくりと研究教育内容の改善・充実のため全力を尽くし社会の付託に応えるべく新たな決意を表明した。

多摩キャンパスの落成は、法人と教学が一致協力し長い歳月をかけ幾多の困難を乗り越えて推し進めてきた「百年の大計」の始まりだったのである。

### 多摩キャンパスの思想

中央大学の135年にわたる歴史を振り返って見ると、施設の拡充は、周年記念事業と密接に結びついていることがわかる。例えば、初めて学員が中心となって寄付金を募り記念講堂の完成を見たのは創立20周年(1905年)のことだった。創立50周年(1935年)の時には駿河台に大講堂ができた。戦後、創立70周年(1955年)には学生会館が建設され、創立80周年(1965年)に際しては駿河台校舎の増改築と理工学部を核とする後楽園キャンパスの整備が進められた。

このように大学施設の整備拡充は、学員の協力のもと周年記念事業と一体化して進められてきたのである。多摩キャンパスの落成記念式典が創立90周年記念祭と結びついて挙行された所以をそこに見ることができるだろう。

多摩キャンパスの落成。それは、法人と教学が長い時間をかけて辿り着いた教養と専門の両課程の一貫性また相互の有機的な関連を保つという観点に根ざしていた。その上で、教育と研究の改善を推進するためには全学部の緊密な理解と調整、そしてそれを担保する制度運用の裏付けがなければ、総合大学として特定学部の分離移転構想は実をあげにくいという考え方に立脚していたのである。

駿河台を後にして多摩への文系4学部の全面移転という壮大な事業の実現は多摩キャンパスと連動し、戸田学長が言うとおり、まさに中央大学が命運をかけて断行した大学改革であった。



多摩キャンパス開校時の全景(1978年)



多摩校舎落成記念式典・創立90周年記念式典(1977年11月10日 多摩キャンパス9号館)